KODAK Gray Scale
Kodak
LICENSED PRODUCT
© The Tiffen Company, 2000

禄志 巻
衛通噂
行

ヲ 6
1293
1

子 6
1.293

文庫

明治四十年四月二日
市島謙吉氏寄贈

街能噂卷之二

江戸前乃隠士　平亭銀鶏撰

我庵ハ松原遠く海近く軒場ヨ冨士の高根とぞ見る。と詠ぜしハ昔ゝの江戸自慢ふして。草より出て草ヨ入る。其武藏野も今ハたゞ。千艘の出舟あるまゝ。萬艘の入舟あり。是ぞ日本第一の繁花の地ふまゝ。世間と知らぬ青人草ハ諸國の漫遊無益ゟと思ハ。

文庫

報得皇朝七十州
功能奚為諸國冠
運送便利夏之穀
惟是中央大一街

居るうしたちうぶも。万松。千長の雅客賣用の為ゑ
初めて此地へ上りて。浪花のひりさぬと見るに。眼ふれる
処耳ふ聞処まとおか江戸ゑ異ゆて人物の質朴なる。
街の綺麗なる。実ゑ是諸國著船の大都會なるとゑ。
金銀財宝ハ文庫ふ満ち。家に重ね黄金の塵錦の
小切も屑紙籠よりいづるゑと思ふだるれ繁栄なれば
二人もおもいゑ心に感じ。先此鶴人ゑ此地の案内を荒
まし聞紀し。夫ゑりして所〻と一覧せんやと思ひける

ゆゑふ夫ゑ〻夫是〻是と。漸ゑ絶え間ぞるりりる。
万松 イヤ〻ふもえうけやーさぐアノ土器の内へ枝豆さの
薩ア芋ざのとふれと少ーて盛っておくのいのをい
ぞふりゑ訳でムヤス。鶴人 へ引のれい子供るぞぶ買り
やに。栗梯味柑大束の類。其外種〻の物と壹文
ゑ〻二文三文四文と盛ゑけて賣のでムりヤス 千長
へ引それい大そに心得ちぐひと致ーやーうるくい又。
江戸のかさのり稲荷の團子や。浅草の鳩へやる豆

ゐどと土器へ盛て置やんりうやつたう其らけで神佛へ呈備めれると思ひやしらぶ余のそろくの物がゐりやんりう。どふりふ訣りと思ッておそろくましやしらぶ夫で氷鮮やしら。鶴人 摠て此地でハ何でも早く賣るやうに物と参て札と附て置やん。万松 なるほど紙烟草菓子の類ゐも札が見えやしらけ。イヤ烟草といへば此地の烟草屋ハ大壮かんでゐりヤス子。中く江戸ハ何様おたべこやハりやせんゐよ。鶴人 さやうさ。箱へ入て出臺ハ上へ

るくべて置やんりうら。鳥渡えると菓子屋の見世の拵でゐりやんり子。依者りゐ江戸の菓子屋のやうに、多くの品のふとたり。臺の上へるくべてゐ世さんりへざりあくいさいくきれいるることたり。千長 米屋も皆半臺へ米といれて札とつけてわるさやすゐ。あんでハ小買とるるれゐハ大きんようりや正。万松 イヤ米でハ江戸でもひときさうおほきさに騒やしらぶこちらくハどゐでゐりやしら。鶴人 此地も矢張さうだでありやしらぶ極上ッさんぐ百八十ぐくね。二百といふハゐりやしるんざッけ。千長 それでハ江戸よりハよりど

安ふりヤス。江戸でハ小賣ゞ二百五十ゝ[illegible]ゞ有
やゝ。其時分よハ玄米ゞ西ゟ三斗くらゐでゞりや
と豆ゞ一升百六十四文。九麦ゞ一升二百。割ゞ百に六
合。赤小豆ゞ二百文。空豆ゞ百五十文青豆ゞ百九四
文味噌豆ゞ百文でありやゝ。万松黒胡麻ゞ一升
二百五十いらやゝと。一合二合ハ三十二文ゞゟ賣やし
鶴人あるゞどあるゝのやゝすでゞりやゝと谷中の
銀雞とゝふ人の処ゝ。日毎のゝろゝとゝふ著述を

贈って寄ゝやゝと。其内よいろくと記してゆりやゝとけ
万松千長口をそへ引銀雞先生をゆるさハぞんじで
ゞりやすゝ。鶴人大懇意で。江戸ゟ居やゝとゝさよハ。
狂哥の明友で。谷中へさへ行ハ。いつでも定宿ゝでゞりや
ゝと。これも七月下旬ゟ上阪とれて。ぶびく宅へも見られ
ゝぶ。七ハ頃よりそろくゝまりやハりゝぶまぐまりく
と江戸のゝふゝも聞やせん。万松さあらでゞりヤスカ。不
佞いらけて銀雞さんとハ心安く。其上ハ子息の鐵雞子

とい西友で。皆董斯先生の社中でいりやんく毎日の
やうに出合まれ此度も善て先生と一処に上阪の積
りでいりやしくふが道中ちとさつぱりのうみりやス
ゆゑ別くになりやしくさ早く逢ふものでみりやス。どもく
よ居まやすよ。鶴人 難波新地の松の尾の坐くに
と借て居まやすが。先ちぞくい爰でみりや正。何方か
も入ぬく先此方へとらひやしくふはそんじの通ての
先生ゆゑ。遠慮ぶりくて。松の尾へ旅宿と取まやし。

万松 千長さあく〜でみりやスカ。モシ松の尾といひやすい大
仕ふめでいりやせんく。江戸で坐くさの繪図とくと
ことがいりやすが大きか摘ひでみりやス。鶴人 こづら
十年ゑ成うるくね身上でみりやスガ。誠ゑ運の善男で
みりやス。まさ此度普請も廣げるとのふことでいりやス
万松 貸坐敷も多分あるぢやアみりやせんく。千長 ぶ
いふ訣ふくて貸のでいりやする。鶴人 硯箱の引出くく。此
かさつけが坐敷の直段附でみりやスゆゑ覽ドや。千長

手ゑとりそめ〜きえあがり　多わど大壮ふ間数でゆヤス子

○松廼尾貸坐鋪直段附

菊の間　金一朱
さつき部　銀三匁
池の亭　金一朱
はかこひ　はゆ
小山ゑ亭　はゆ
瀧の亭　金二朱

鶴の間　金二朱
兎の間　はゆ
桜の間　はゆ
但し此供部屋付
中二階　金百文
但し壹ゝ部屋此料理場
此つゝひ京紅ゐせりゆ　金三百疋文ゆ

大山の芝　はゆ
小さ〜ゑ　はゆ
亭ざ〜ゑ　はゆ
はかこひ　はゆ一朱
はゆ二階　はゆ二朱
茶さ〜ゑ　はゆ百疋
はかこひ　はゆ一朱

大二階　金二百文
但し壹ゝ部屋此料理場此つゝひ京紅ゐせりゆ　金一両こつゝ

大阪あんで新地
松の尾

万松　多わと手廣ふこゝでゆヤス　千長　コリヤアモン

江戸ヨいムりヤせん子。カウいちく直段附とさるい大空ヲて
ムりヤス。鶴人 まづ穿ぐりのりやハ五六月い毎晩蛍と二
貫ツとるハといひやすぐ。一夏ヨい十両ろ〳〵十四五両も入
さうでムりヤス 万松 ふるわど其おもふしと聞ことぐ
いりやハ。餘計飛せべとるハわど見物ぐ出ると云と
でムりヤスガ。コリヤア ちゃれでいるとやハ。イヤ先刻おもふ
の銀雞先生の日毎の心得の後篇ハ御代の宝もモウ
駆刻やしと 鶴人 さうでムりヤスカ。銀雞さんヨ明日私

宅へ来ふさるやうふ人と遣や正。私もちと用ぐのつ
やハ 千長 万松さん迎ものほ厄介序ヨさう願ふぢ
ヤア子イカ。さうすると大分都合ぐつ。先生私いまこへ
中ヨ。彼是半年も世話ヨなりやしことぐぐうヤ。
鶴人 さうでいりやすうへ。それぢやア明日い四人で一
そこへ出うけて。大のことつふちゃれよしや正。ノヤちゃ
飲やハヨいひところぐムりヤス近頃引札と仕やし
會樓とりへ茶屋でムりヤス。嶋の内三ツ寺筋場ヶ

西へ入ところでいつてやす。料理も中くおつてるなりをし
喰せやしませい先ず一ゲ直段ゲ格好でありやしたそれ上
家い新宅で奇麗でムりヤスろ。奇妙な善ムりヤス。
明日い其処へは同道いたしやす正は覽じやしてれゲ引札
でいりやしたソレ仕まひの処ゑ直段附ゲムりヤス

松の露　御茶漬
五種菓子ろん
三種香のもの　價八分

御酒御さかな
三ツ鉢取合
價　壱匁五分

此菓子椀ゑとい脱のとちゲひやーてよりど塩梅ゲ
ムりヤス中くハ分や壹匁でい引なそね沢でムりヤス
して酒ゲ至ッてよくムりヤスよ　万松　ゑるほどこれい
ものでムりヤスこれでい流行や正　千長　本ゑ此引札い
達て旅宿で見やしたゲ旅宿のいるどもさうヤ
ウけ。鳥渡のまハ會樓ゲいとうたるーゲムりヤー
ゑるほど此吏でいつてやしたいさいの先生のは案
でい方角も筋も聞ゼス歩き。先一ツの安心でムりヤ

鶴人 イヤ銀雑さんも道ゞ知ねいよい。強弱りの噺でゞりやーゝ。万松 ほ噺ようゝてほ盃ゞ潤やーゝ。先生一ツ上もの正。鶴人 つゝぶれま正。時ヨのまりほ肴ゞ荒さ。とりの処へ豆腐屋ゞ来る。コレ夫と奴豆腐ゝ。下女 ヨのひつけ。豆腐とゝやる。持ッて来や。下女 ハイゝ。千長 モシ此地の豆腐ハ結構でゞりヤス子。鶴人 さゝうさ随分能ゞりヤス。モシ此方ゝ豆腐ハいくれで一丁でゞりヤス。万松 一丁ヨい大分小さゝゞりヤスゝ。鶴人 江戸ゝ半丁よりもまゞ小ぶりゞ有

やす其替ヨハいくれで十二文でゞりヤス。江戸ゝ一ツ丁ハ六十文。半丁ゞ三十。小半丁ゞ十五文でゞりやすゞ。此方でハ半丁小半丁とゝふい賣やせん。千長 成わゞそれでハい訣でゞりやゝ。此地の一ツ丁とゝふのゞ。江戸の小半丁でゞりやゝゝ。雀人 油あげハ江戸でハ五文小賣やゝゞ。此方でハ却ッて四文でゞりヤス。焼豆腐も近頃ハ江戸で。五文のやうすでゞりヤスゞこちゝゝ貳文ようりやゝ。モシ江戸と遠ッて益蒟蒻とこちゝゝで

い。豆腐屋でいうてやせん。別よこん少く屋げいりやい。
りシテおさがつい〳〵知らんがこちらこれ八百屋でい茄子
白瓜芋大根の類ひ何よう〳〵。一山いつとけそこれで
河豚とふ礼をつけて置やれ〳〵。買ヨ至ッて重宝で
ムりヤス。千長 イヤ万松さんソレ此間木戸ヨ張て有ッさ
ッけ。万松 さあり〳〵其書附と写ーて置やーさいひ
るぐ。帰入よう出し。宝人ヨロ〳〵。鶴人 何でいりやい。といひて同さんもお。
千長 其モシろ〳〵どとつい何のことでムりヤスぞ。
法度書るり。

鮮やせん。鶴人 ヘヽコレハ矢張穴一のやうふうで子供の
遊びでいりやすが勝負ごとでいりやれ〳〵。法度
書に載ていりやれ。私も委しいことい存じやせんが
といひるぐ。そばにある卓のうへの筆とり巻帳へうつてえせる。子供のさるを見やれよ。何ん
此柳る筋と土間へ書て。此筋のうちへ銭と打込んで。
其勝負がいるさうでムりヤス。万松 ヘそれでろくど
が分アとやー〳〵。千長 さうぞ何ろ分らぬ看板と見ー
さッけ。万松 さうり〳〵。少ーかんぐ。それくそげぬさ乃

茶さ。鶴人へそれいとげぬけの茶さこら〳〵でいとげと
そげといひやれ。まづ〳〵江戸と大阪とで名の違ッた物
い幾等もありやれ。江戸でいふ臺所の流しのことを。
大阪でい走といひ。あたしのことを切藁といひやれ。鳥
渡しことぶ。あまりぶしをなぶしぶしい。鳴やこと
茄子の田楽といひやれ。江戸でおかこさんと云を。お家さん。
子供をぢんち。娘を糸。女をたべて姫といひやれ。其外
唱のちがふことい中〳〵急よい思ひ出せやせん。そもさうも

まだ江戸ふ。ふいことがありやす。春〳〵夏へうけて日の
長い時分になりやれと。晝飯〳〵夜食の間ふ。又飯を
一度喰ひや。是と八ツ茶も小晝ともいひやれ。京都ふ
しハチンズイといひやれ。万松初めて承ッたやうな。小晝
も八ツ茶もわるやれ。ケンズイといふいどふ。ふ詩で
わるや正。鶴人鐘成さんの説ハ。ケンズイハ文字で書
い間炊と書がありやうといとれやうさが。至極面白ふお
ぞえやす。千長なるほど晝飯と夜食の間〳〵のぞ

ゆりやうゝ。間ゐ炊の字い面白ケりヤス。今年い大分
江戸先生方ガ上阪さるれやゝゝ。春中い椿年さんガ
見えるゝ。文二さんガ来る。此間公長さんの処で聞バ。
武一さんも見えさうぐ。千長 焉馬さんも鳥渡登
やゝゝぶ。ほ尋ヤやゝゝ。鶴人 鶴の屋老公羽の宅で
逢やゝゝゑんゐ。鶴の屋先生へハほ尋なさんやし。狂
哥の大人でゆりヤス。万松 ゐるほど面白い哥ガ大分見
やれセレ壺中菴大人のほ宅い何方でゆりヤス子。鶴人

南久宝寺町二丁目でゆりヤス。お知る人で有やけ。万松
さやゝでゆりヤス。去年江戸へ出られさるゐ。詩佛先生
の処でほ目ゐかゝるやゝゝ。毎月十六日ゐ煎茶會乃
ゐるのハ何方でゆりヤス。千長 フレ魯鋪さんも喰やし
ゐつけ。嶌の内東堀清水町よ。万松 ゐるわどゝく。花
月菴大人ゞ。千長 やゞ二軒ゆりやゝゝぜ。鶴人 フリヤア
熏陵堂でゆりや正コリヤア毎月廿五日ゐ會日でゆりヤス。
万松 モシ西横堀北の御堂の後とゝふハ何辺でゆりヤス。

鶴人 直其所でゝりヤス。良山堂へでもあ尋ねろよ。万松 さゆうでゝりヤス。ゾれハ余程文字のゐる人ざと。魚浦 さんの噺でゐりやゝさっけ。鶴人 良山堂茶話ふどゝ白いものでゝりヤス。万松 さゆうゝく五山先生の宅で。鳥渡見やゝゝゞ面白ゝりヤス。鶴人 イヤモシ五山先生とハ詩話ハ段ゝ跡ゞ出来やしろよ。万松 相ゐやゞ年ゝ出来やし。鶴人 社中で獨入て拍貫やてゐめゞ有やしゞ。今年のハ間ゐ合やすゐの。千長 さゆうさ来年ゞ能ゝりヤス。此間銀雞さんのみやげゝ貰ひやゝゝゞ江戸繁昌記いあるゝど名文でゝりヤス。ゐのモシ茶菓詩のうちハ食傷行ハ善手ぎいざゝ。九ゝ胴脉の口調でゝりヤス。ゐれハモシ何方ハ人ざゝ。千長 掌中名物荃と書やゝゝ。春水子の兄でゝりヤス。鶴人 へゝ本草家の福井の。万松 さゆうさ。鶴人 本草家で思ひ出ゝやさゞ。楽斉子ハ知る人でゝりヤスカ。千長 竹馬の友ゞゝりヤス。大分近頃著述ゞ出来ます。豊年穀艸の跡

で何ん吉原の穿鑿物が出来やしがモウ彫刻ゐかゞ
やーさろふ。鶴人 琴亭臺先生の著述目録ハモウ大抵
集つたやーさらふモシ先哲叢談の評判い大阪いかう
ざふ物でゆりヤス心斎橋筋の書林で何処で聞ても飯
賣るといひやし大阪い奇妙な処で著述ゐどが當る
ゐると金銀ゐい厭ゐび買て見やし。ちやうごとざの
魯助さんの癡談をどが壱分づゝゐ賣やーさモシ飯遠
の先生い強氣ゐのんざゐ。ちやうごとおも一番ゐがく

書きてけりやしがけがそうつい誰が何といつても和
学者の親玉ざらふ。千長 ほ説の通でゆりヤス彼是いふ
ものがいつても迚も叶ひやせん著述の數ゐどい矢の倉
の親玉の上へ出や正琴亭臺先生ハ著述目録やも一番
筋うひがおやふゆりヤ正鶴人 政德先生の墳墓漫録
いまゞ板ゐいるりやせんろ。續草緑集と五部ばかりゐ
しいのでゆりやしが。大阪の本屋ゐい拂底でゆりヤスいま
でもは會日が十六日でゆりやすり 万松 矢張毎月十六日

でゝヤス。鶴人イヤ千長さん江戸へは序のとれる文雄さんの名乗字引と三十許取よせてくださりやアハモシ強く調宝るものでゝヤス。イヤ山鳥さんの花こよみハ跡ハ出来やせんゝへ。近頃いさゝか作も見えやせんが。日待物語ハ大穿で。丸ゝ本町菴でゝヤス。千長江戸名所図會ハ覧るさんりやゝ。鶴人おゝ。ゝわやゝのうちと五車亭大人ゝ贈てくるとやゝ。能密ゝ出来やゝ。江戸でハ何ゝどでゝりやゝ。大阪でハまゝ真ゝ知ぬやゝすでゝヤス。万松江戸でも安く賣ぬやゝすでゝヤス。鶴人イヤ此間銀雞さんゝ貰ひやゝさが吉原花競三十六佳遷ハゝのゝとハ大穿でゝりやゝ。早く出来さうちゝ強ゝヤレタ。千長さやゝでゝヤス。吉原のこゝそ此度奇代の書が出來やす。好問堂主人の校合で。吉原通とゝふ本でゝヤス。鶴人好問堂とゝふハ文教温故の作者ざゝ。万松さゝうでゝヤス。當時江戸で。三四人の博識家の内でゝヤス。鶴人大阪でも噂と聞おゝびやゝさ。

博識のことにおのそい余程の人ざさうぐ。燈臺原暗で江戸ふ居るとこたつひ迄目まうアあーゑんぐ。宅い何方でゆりやい。千長 種彦さんの近所でイヤス。鶴人 種彦さんい矢張前の処でゆりや正。万松 さやうでイりヤスどこた先生大阪の女郎い江戸とちがッて強くつとめるチャアイりやせんぐ。鶴人 勧るとふ決でもゆりやせんぐ。モシ女郎い大阪のことでイりヤス。新町ちがくいッくはこ覽ぢやし。嬋娟ふる者ぐ余りど居ヤス。千長 新町とふのぐ江戸でいふ吉原でイりヤスガ。鶴人 さやうさ新町と廓といッて。御免の場所でゆりやい。慶長の頃やでハ。諸〻方〻ふ遊女屋ぐゆのうさうでイりヤスガ。夫と寛永年中ふ今の土地とくぐされ。諸処の遊女屋と一処ふゆりあて。廓とるりやーまぐ。今ハ新町でゆりやい。万松 揚屋ハ立派ふい其新町でありやい。鶴人 さやうさ。京の女郎ふ長崎の衣裳と着せ。江戸の張とりくせて。大阪の揚屋で遊びてハ。といふい新町のことでゆり

やハ【千長】揚屋の数もよわどいりやすうる。【鶴人】ハ
う七八軒もムりヤるッケ。まづ堺屋ゑ吉田屋。中ずゝ
ふ井筒屋。高嶌屋ふたりよ。茨木屋と七軒でムり
ヤス。【万松】モシ置屋といふハ何のことでムヤス。【鶴人】女
郎を抱へておく内のことを置屋といひやハ。江戸のやうハ
女郎屋へ直ゑ入ッてハ買やせん。大阪でハ揚屋へ女郎を
呼出してあそびヤスそれも新町だりのを揚屋と
称へ。いりの茶屋のハ呼屋といひやハ。【万松】跡の茶屋

とハ【鶴人】新町ハ。江戸ハ吉原のごゝ。御免の場所で
ムりヤス。其外江戸でいふ【岡場】所といふやうなる幾等も
いりやハ。嶋の内ざの。坂町ぶの。難波新地北の新地
堀江馬場崎。霊符ゑなど。数おほいことでいりやス。江戸
の御旅。松井町。常磐町。根津谷中ゑどのやうな
処でいりやハ。それと大阪でハおゝるへて嶋といひやす。
江戸でハ岡場所といひやハ。其処の女郎を揚ていそ
ふ茶屋を。呼屋といひ。新町のを揚屋といひヤス。【千長】

ゑるわごは咄で呼屋といひ揚屋といふ訳がこうつて
やしく。万松置屋といふことい新町でも外の場所で
も同じことでありやれうま。鶴人置屋い廓も嶋も
同じことで有ヤス。千長新町ないい置屋もよわどあり
ヤ正子。鶴人さあうさ先大きふのい。くるそやつちや。
いの井。中の扇屋。東の扇屋西の扇屋西のとりや。
東のとりや。其外ふもかこ喜。松瀬。かぞや。ちくさや。
おそぐるや。綿長八百新あぐ。ぐらもありヤス。万松

モシ新町ないい女郎ないい引舟といふがあるじやアりやせん
ろ。江戸でい芝居の桟敷ないい引船といふがありやれが。
女郎の名と引舟とのふいどふいふ訣でありキスま鶴人
引舟。鹿意端女郎。棒頭女郎。ぐるいふぐるくの
名がいりヤス。引舟といふい太夫ま附て行く。女郎乃
ことでいりヤス。屋言でいそぐ太夫い大船ま表し。それま
繋ぐる舟ま多。引舟とのくのでありの正。万端太夫まつ
いそぬて。取捌ととる役でありヤス。江戸吉原でいく

番新のことでひろやすぶん。そんざろう引舟は賣は致しやせん。浪花枕といふ随筆物の説では此引舟といふ。夕ぎりより初ることひろやは。夕霧は一ッ体京都の嶋原は女郎で。扇屋四郎兵衛といふ者の抱で。其扇屋が寛文年中に大阪へ引越やしと。其比夕ぎりが下るといふ噂が。大阪中の評判となり。毎日く川筋は見物が山のごとく多ッことひろやス。夕霧の美艶さこそは何ともいふべからず。其上萬藝に達し。行儀殊に言語に述がたしといふのみで有やはり。ザア大阪へ来ると全盛日に増して。所〻方〻より揚屋より。大臣のゆねくこと。引もきしびとふぶこと。で有やは。そこで夕霧も勤ひぐ人で。自分で一人で女郎と揚て召つれ。諸方より一時に口の掛ッことは。此揚女郎と先の揚屋へやりやして。坐と持せておき。初めより来る客と順〻に勤めく廻ッことはいやは其とは此揚女郎のことと。引舟と名づけることひろやス。夕霧

より前ハ。太夫も引舟を連てゐるゐやすことハ夕霧
〻〻此方のことぐさとゐひヤス。千長それで引舟の訳ゞ
知まやーゝ。モシ寛文年中といッてハ。夕ぎりも百七八
十年にゐりヤス。鶴人さあうさ。万松先生其浪花抜と
いふハ誰人の著述でゐりヤス。鶴人撰者ハ知やせんゞ。宝
永三年の年号ゞゐりやに。三十四五枚ぐゝぬの紙ゐび
で。五冊物の写本でゐりやに。六樹園の蔵書で濱臣
と真顔の序ゞ附てゐりやに。跋れかもりに京傳と鬼

武と三陀羅米人のあれゝゝが皆自筆でありやに
塵外楼ゞ板ゐもる積りで。余ゞ校合よかりやー
さうけゞ逐ゐ故人よりやーゝ。写ー取て置やーゝ
〻ゐ逗留中ゐ写るゐさ。千長それハ有ゞふりヤス
アノモシ伊左エ門ゞ馴染ぐゝといふのも実説のことでゐり
ヤスカ子。鶴人浪花の枕の説でハ。伊左エ門の訳いゐと
〻もるハこゝぐゝとゐりやに。アレハ阿波の鳴戸に作物の
説でゐりヤ正。千長ゐのうちに阿波の大臣といふがあり

やす。アレハ大阪の分限ゝ阿波屋某とゆふ大臣ナヤナ
ムリヤせんゝ。鶴入さゆうさ其こといのりやゝ〜ゝッけ。ゑん
でも夕霧のことハ盡ゝていのりやれ。延宝六午年正月六
日ニ死人ゞとのりやれ。法名と花岳芳春信女といい
やゝ〜ゝッけ。寺ハ西寺町淨國寺ニ葬るとのりやす。
万松 夕ぞりの白ざとゆふことでムリヤスゞ。アノモシ兄の
親手笠いとゝもね時雨うゝ。といふ白でのりやれ。鶴入
ゆゝ情合とゆひやゝ〜ゝ。傾城も昔のい皆立派ゝことでのり

やれ 万松 アノのりよも大阪ハ女郎でムリヤスゞ。鶴入さ
やゝ〜ゝ。阿津滿。毛呂古志。静南賀登皆大阪でムリヤス
のづまハ夫摂州山本村の坂ノ上何ゞ〜とゆふのゆふど
んで請出されゝとゆひやれ。其ゝの奇ニ身いゝふゝハ
心いゝゝ名ハのりよのゝ。ありためゝる山本の里。名ぞゝん
ゝゝでムリやれせの。千長さやりゝ。聞ゝ哥でムリヤス。山本
村の坂ノ上与治右エ門と呼ゝ。作ゝさとゆふ流行ゝゝが
のゝゝやゝ〜ゝ。東ゝけゞせ山嵜与治兵衛清出せゝ。山

嵩与治兵衛そっこで清ざせ三百両。とふうさがりゆり
やれ。万松 ありと思ひ出しやーさ。銀鶏さんの茨會の
ときさん。三馬と豊国トして踊アこやーさっけ。鶴人 アイ其
哥ハ何でゆ見やーさ。浪花物のうらふも出て居るうさ
でゆヤス。千長 奥州も越中も大阪の女郎でゆヤスカ
鶴人 さやうさ。越中ハ木村屋又治郎の抱で。延宝年
中ハ全盛の女郎でゆさ。ゆるとこれ揚屋でゆーさこの
客ゲ風呂へ入ゝて下帯とんづーて。ぺんとをるとこそゆるも

姿の見ゲるゆれと思ひ俄ハおりひつて。己ゲ湯具の褌
縮緬の二布ととれ[illegible]て。これハ紐とつけて客ハゆさ
へーさとゆひやれ。それゆうして越中褌の名い起ッさと
いふ説ゲゆりやれ。越中の國より初ッさとゆふい。全く
俗説でゆり正。千長 ありと越中褌の訳いさうく
ゆりヤ正 万松 鹿意 とゆぎふいふ女郎でゆヤス。鶴人 鹿
意といひやれい大夫天神ハくべていこびて居ゝとゆふ
より。茶の湯ハこうとがこひとゆひやれ古くハ

文字も囲とかさやしこそれと又一憂して閑な処よう。
深山の鹿のことたりやと小男鹿の意るといふてろよう
鹿意とうたやは。千長　ろうわど面白はたやでゆやス。
吉原でゆぶきてゆる女郎とゆ。お茶を引て居るといいやスの
も。今のかこひろ来こやつで。矢張客がるすくて閑な処よ
居るといふ心でゆりや正。鶴人　面しろのお説でゆりやス。吉
原のも全く茶の湯ろ来こやつふちがひるでゆりや正
牽頭女郎よ端女郎ハ跡説がゆりやはこれハゆりっと

はこそろしもの正。千長　モシ天神とうよのハどふのふろけで
ゆりやは。万松　天神すげふでも結で居のでゆりやはが。
鶴人　イヤ天神とうふハ昔ハ二十五夜てよ賣やしこ。
夫ゆ忍ぶ縁日ハ表へて天神といひやは。梅の位とうも
それろ来こ名でゆりやス。これろハ太夫ものゆりやス。
ずっとむかしハ。大天神小天神とうがゆっこころでゆ
やス。大天神ハ四十三夜ようっこころでゆりやはが。宝暦
元年ハ止はるりて。今ハ小天神ばかりこりやしこ。千長

天神ハ花でも買やれう。鶴人買やすくも線香一本が四
匁三トでゞヤス。一寸ばかりとびよい線香二本ハ雑用五匁
出せばいゝやれ。千長ソリヤア安いのでゐりやれよまろ
藝者でもゐげずばをうゝるりんでゞりや正。鶴人藝子と
ゐげても花で買やれうゝ高のしれさとでゐりやれ。万松
大阪でハ藝者のことを藝子といひやすゝ。鶴人さうか
さ。藝者と藝子との分ちハ江戸よりハ大阪の方がよう
ゐりヤス。藝者とゐへば大阪でハ男藝者のこと。藝子と

いへば女ばかりでゐりヤス。者の字が男なるゆゑ子の字の
ごとくなるハ。すべて志の無言語でいゐりやれめへう。千長なる
ほど動やせんな。万松大阪でハ藝者がイヤ藝子が女
郎より上坐をとるぢやゐりやせんな。鶴人それも善き
ありでゐりヤス。新町でハ江戸の通やつぱり女郎の下へ
藝子が居やれ。其外の場所でハ藝子が上坐へすゝ
むりやれ。万松大阪でハ藝子が太鼓とゐふので踊ばか
ゐりやせんな。鶴人十二踊とゐふ訳でハゐりやせん。舞ふので

ありやしが。太鼓もあいたやしが。三味線へのる塩梅が至て古風で上品るものでありやした。信州の軽井沢や。追分で太鼓とるやつそ。女郎の踊るとい同日の由噺はいるりやせん。銀雑さんあぐも。何ら初のうちハ不承知でありやしたけど。此頃い大のうけで。何ら女郎ハ大阪ま留るとい説ぐ出やしたッけ。千長いうさあれい買てんだバ分りやすめの。先一寸遊ぶまい何方ぐようありやス。鶴人何方とい訳いりやせん。大夫の外い皆る線香で買やしたら

何方でも能ありやスガ。マア一寸じやまとまい阪町ぐあるりやス。万松瓢箪町とつふい何方でありやス。鶴人新町迄を越ての通筋でありやス。千長モシ瓢箪町のいそれい。太閤様より御馬印の瓢箪を頂戴しゝ人ぐ住んぐ処ゆゑ。さうつふと聞やしたぐさやしでありやスカま。鶴人さうつふことぐさうでありやス。大昔い道頓堀ま瓢箪町といふぐ所のつゝさうでありやスガ。元和年中ま今の所へ移しゝとつふことでありやス。伏見の人ま。木村又治郎と

いふ浪人者がいのりやしてゝ。其人がどふつふ訳ろ。太閤様の虎馬印の瓢簞といふぶいろ。所持して居さとふこと でゝりやス。此こゝも浪花の枕よ出て居やス。

万松 瓢簞町の夜見世の所と。一蝶が書やゝ軸物と持ておりやしたが。アレハ珠しゝのもでゝりや正。

鶴人 ソレハ虎珠蔵でゝりヤス。私が処よ延宝八年の印本で。難波鑑とふ大本六冊物がゝりヤスが其内よ瓢簞町の図も出てゝりヤス。又文も面白いとゝでゝりヤス。今出してお目よりけや正。

とゝひるゞゝ。坐右の本箱より。浪花ぐさと出し。二巻目の瓢簞町の処とゞゝ。虎覽しやゝ。ゝでゝりヤス。

千長 口とそろゝゝコレハ虎珠書でゝりヤス。延宝八年でハ百年ろゝみるりやし。

万松 少しゝ百年どこでハいのりやせん。寛文の次でいのりやしたゝ。今ハ天保六年ゝゝ百五十六年になりやす。とゝひいふるゝ本よいゝ。

作者云此文中かるちぶいあれど吉文と為るゝで投合と加次其まゝつれるゝ[illegible]文字八字居合と記す

瓢簞町夜見世　三月朔日

○いふゝ人ハ貧和のちゝちもあくゝぷとふぎ安ありしゝぐひしゝ世の次災の難よかゝやしゝより。岩鳥ふしゝねどおのち

ぞりも多くなりぬ。夜だのりれ出入とるまゝに月〻廊の
うちに閑居なる灯と失ひるこゝちして。物の業ハ拙
く入くとそ行れとけ。ひくう人もなく。ところゞとげ
に寒ゆゆきて。冬の日の短きと。なるゝ。おのゝるゞ
きと苦しむ。ものこゝろ寒苦たひしくぬけ
ぬ。廊格なる出もとゝいふ。ものをれる色。言ど
延宝度のとし。まゝの三月の初日ゝ。ものゝ
節日まゝいどしゝ。おろ毋どかざるべしの作の

うけあたり。河陸京瓢簞越後三筋八町ゝ。
まゝ。廊〻の青候屋とりて。どりやとり迎ハ。
第灯舎にてとるゝ。入くるゝ人ゝとあひ合
くからゝりゆくいるのハえのんひきはくろひ。
楊の立とうゞり。明盛とうげまそ。おのゞをゞもつと
ふゝり。ものハ揚屋のくらに入るるふうねた。西
東の門家うゝ見をゝ人をゝ。内ゝりいづる西し。宿乃
そ尾去を角ゝうゝ。ぶ跡ゝうれる。僕の

ゆうくんまち

あり。ふりとふてろとつけて見うへ人もあつまりぐ
ゐる。そもく頓珠頓国のこと。蓮不書ふもアんえされば。
今ことにつそんもむげうぎれけ郎のうち。春史と
たしろと。天邦かとひ。だ一頓機やうで。凡二ゐ二ゐ
余人ふ及ぐ。まてこれのおもたくにりそわれ
ゐまとてぐぐ。あうひふ情とうと。狐と聞く。枯と
まるあれ。あのひやれこあうく。さまを
さる人。長露は寝ぐ。家のよ箱ふ。ぐ。ど乃

もりこまもセ。大坂は九軒町などけそびこうの乃
これところ。あまさと絵。ぺひりそこ一けこち
ふけまこは門あれど。東西こり。邦ハ事ようべ
あうけく。絵門とうふ。やけばけくこりや。大こは時ハ
ぬ一こそ。人とこくこくこくこ

万松 **千長** あるなど面白ハ文でムりそ。画も古風あ
りのぞ昔ぐあのぞれやす。コリヤ。此間よ出まくこくき。
鳥渡写て置や正珠しのりよぞ。**鶴人** さこふさりや書

林ゝ絶て無りのぞ〻りやス。万松モシ此画の天窓の結ひ
やうハ。今の大阪ハ風ゝも又ちゞひやすねい。鶴人さゆう
さ今の風ゝそちゞひやハ。大阪の女郎のかみ〻そ
いろ〻ゝ名ゞ付てゆハ。此撓髪ゝも結ふ
ゝまゝやせん。先ず一江戸で見ゝけぬこゝハ大阪の女ゝ。
女郎でも素人でも。笄どさす穴と。張帛でこしらへて
髪のうちゝいまとて結ゝ。其中へ指こゝやハ。千長ソリヤア
奇妙でゞりやス。それでハ天窓ゞ痛くゝてようゝ〻りヤ正

万松モシ大阪でハ髪の風ゝ金猩〻とゝゞをやる
ヂャアゝりやせんか。鶴人其ゆうハでゝりやス髪の名〻
髪〻ゝ付てやハ〻ゝ。それゞゞゞ分りやせん。私ゞ
覚えて居たゝりも。横這。両輪。サツカウガヒ。兵庫。
勝山。三好髷。片笄。鴛鴦。勝山崩。紫若髪。忍返
奴ゝまゝ。本銀杏。裏銀杏。鼈ゝゆゞ。立兵庫。横兵
庫。かぶせ両輪。ぬき出し両輪。平一両輪。かせ。向かせ
先鳥渡〻〻処ゞ此〻〻ゝのゝりやハよく考へるゝと平

五六結りくぐりやけが。妻しいこと銀雞さんの技度
書きやけ。女郎花浪華穴とゆふ本よ。一く図と出し
て論じてゆかやけりくそれが出来さくは覧じやし。
帯の結ゆうみも種くの名がゆりやけ。鴛原結 お出
結 吉弥結 あくゆ結。文庫矢 千鳥 輪違 九山結
立挟 横挟 数おいことでゆりやけがそれも皆結び
ゆくが図よ出て居やけりう。直ようりりヤス。千長 あく
ア結とゆふのが娘が結んでゆるのでゆりや正。鶴人 さあう
く中以上の娘が出さちの皆ゆくゆくもむとびでゆりヤス。
万松 おさあけ浮きそは盃どうゆきやくゆ先生
一ッゆがゆ正。鶴人 ゆづおうさひ。千長 万松さん一ッゆう
くゆくゆおわげまさんやく。万松 大気よ出来すびやく。
千長 先刻のはさあけ。坂町。馬場崎のゆうゆとろ
い数多いことぶとお嬢でゆりヤンタが。外よい何程ぢうり
ゆりヤスよ。鶴人 さゆくさ。私も妻くい知やせんが。余程
ゆりゆ正。ゆのが外のれ。新ぢり。北ノ新やけ。新宅。天満

新霊符あぐらいふ処もいりやす。夫〳〵さげつて江戸ぐく
いふ切見世といふやうなのこいつくらもいりやす。尼寺。
とぐろ。羅漢前。高津新地。上塩町。玉つくりは新宅。
ひげそり。生玉神前。新やしき。さかぐ山。羅生門。これ
らはこんる事の揚代でゐりやす。万松坂町は何をも
ゐりやす。鶴人揚代が二十四匁で。花が二匁花でいりやす。
千長馬場寄霊符るどい何程でゐりやす。鶴人こんる
八分の花でゐりやす。こゝよりこんる人の考へねこゝろありやす。馬場

寄は毎度四ト花でいりやしやす。いのり線香が早く立
やしりゝ。二本掛すて八トと賣やす。それぐゝ今でも
新造の振袖は三本掛といって。花三本でいりやしが。直
段は壹匁二トで三本のうりでいりやし。前の四トづの花
三本のうりでゐりやす。様子とゝろね人は三本掛といふゝ。二匁
四トとゝまると思ひやしがさういふ訳でハゐりやせん。万松
あるほど是等は心得て居ていひてこゝでゐりやす。千長馬
場寄ふも置屋といふ。余りどいりやしうね。鶴人よ

わどもりヤス。大梅。丸屋。大中。播安。佃屋。寺梅。大江。河内屋。とおぢえやしくらぶ。迄ゝりヤ正実ゑ呼屋い数おれいてとでゝりヤス。万松 坂町ゑいどの位ゝりヤス。鶴人 是もよわどもりヤスが。夫も是も浪花のやゑのこゝに居りやけらこゝ。今に成覽じやし。モウ草稿ゞ半分い出て来さやこうすでけりやけゞ。画組と英泉ゑ書せていとゝとこで。英泉子ゑ上ると待てゐやこうけでゝりヤス。万松 英泉さんいうまいりんでけりやけよゝす志の無こゝろとゝれやけ。千長 イヤ英泉さんで思ひ出こゝ。唐物町の河内屋太助といふ書林へ板下ととゞけてくまろといって。包物を頼まれやしくらぶ。唐物町といふい何処でゝりヤス子。鶴人 心斎橋筋の大壮書林のいる処でゝりヤス。今通ッてゐ出るすッくらふ。千長 るゝほど本屋の沢山ある処と通ッて来やしくらぶ。モシ大壮ゑ書林でゝりヤス子。江戸ゑい却ていのやこうけ。ゞくくと本屋の軒とあゝべて居る処いゝりヤせん。鶴人 さあゝ。江戸でい先通町

筋ゝゝ芝の神明町ざごこれも所ゝぐでゆりヤス一町ま
四五軒ゝもゆる処いゝゆりヤスめん。万松 日本橋の四日市
よいよりどゆりやしぐ。是い皆ゐ干店でゆりヤス。鶴人
さまりゝ江戸橋ゝゝ四日市へ出る処ま余わど見やし
ぐろゝわどゆきい持出ゝゝ見えヤス。心斎橋筋い五
六町ぐりぐ内ま四五十軒もゆりゆ正。私ゆおぐえて
居書林ぐりも此位ゆりヤス。本屋の名を記ゝ手扣と見やる。子長
あゝゆどこれい駿しめこゝぐと。河内屋徳兵衛。

加賀屋善蔵。河内屋儀助。河内屋吉兵衛。伏見屋
嘉兵衛。河内屋太助。河内屋仁助。河内屋喜兵衛。塩
屋忠兵衛。河内屋平七。名田屋佐七。塩屋卯兵衛。秋田
屋市五郎。天満屋安兵衛。河内屋佐　助　河内屋源七。
河内屋直助。河内屋長兵衛。塩屋平助。伊丹屋善兵衛。
河内屋茂兵衛。柏原屋清右ヱ門。秋田屋太右ヱ門。倉橋
屋弥一郎。柏原屋源兵衛。敦賀屋九兵衛。藤屋弥兵衛。
播州屋九兵衛。ゆゝわど大壮でゆりヤス。僅五六丁の間ま。

此位書肆のいる処い何方ふもいりやしわの。鶴人 是みて文華の盛るることを知るべーでイヤス。実ま大都會の地でいりヤス。エア段ゝ居ますんでは覧じやー。余わど住いん処でイりヤス。殊ま此邊ま居やーてい。江戸の日本橋辺とおふーことでイりヤスカラ。何でも居て居てことゞ足りヤス。其上冬い暖気で火吏いるー。銭金いふんゞんる土地といふものでいりやしたゝ。鳥渡見物ま来やーゝと人も。長居を仕ゝう又い世帯を持て。行ゝ然ま大阪者ま

るゝゝと人も幾等もいりやし私ゝ今年い暇らふ来年い行ゝと思ゝて居やしたうちに早八年居やし其内ま段ゝ知音ゞ出来。今でい迚も暇らまゝせん。千長 コリヤアさやうでイりヤ正私どもの友人も。大分大阪ま足ゞい向ゝさ人ゞイりヤス。万松 段ゝ虫嘶のやうすと承ゝやーてい。二人るゞゝ又大阪ま留るうも知やせん。鶴人 どゝでさゝるさりゝ。いゝ虫嘶相手で。おゝゞひまお力ま

ゝりやゝてよゝイりヤス。女房 檀那へモウ暮うゝとゝうしゞ。

お夜食の何よりも正　鶴人　夜食の有りのぞ上さ
せい時よいッぞん茶ッそ夜見世へお供いさしゃ正　千長
万松　ソリヤア有ぐさりヤストいふ祈しもこまこの鐘ボヲン